

ずんだ団子を作る ～収穫した枝豆で～ 若葉台保育園（福島県いわき市）

[4・5歳児]

作り始める前に、「枝豆の房には、何個枝豆が付いているでしょうか？」のクイズに、自分なりに考えた個数を発言する子どもたち。4歳児が先に料理教室を行い、続いて5歳児が行うと、クイズの答えにも年齢による違いが見られた。枝豆に対する興味もだんだんと強くなっていき、歌を歌いながら楽しく料理をする子どもたちであった。

<枝豆のことを詳しく知ろう！> 8月下旬

調理を始める前に、グループごとに枝豆の観察を行った。「やっぱりザラザラしてるー！」とA児。「よく見ると豆がギザギザしてる！」「お茶の匂いがするよ」と、5歳児。葉を見ると、「葉っぱに穴が開いてる！」とC児。「どうして穴が開いちゃったのかな？」と質問すると、「きっと美味しかったから食べたんじゃない？」とD児。調理する前に枝豆に触れたことで、より関心を強く持った子どもたちの姿が見られた。「それでは、この枝豆の房には何個枝豆が付いているでしょ～か？」と保育者が質問すると、どんどん予想した意見が出てくる。

予測した結果数

4歳児	5歳児
2000個.....2人	50個.....8人
100個.....14人	30個.....6人
32個.....3人	20個.....5人
23個.....5人	



五感を使って、枝豆を観察できている。

数の概念、量の感覚の、年齢による違いを確認したい。

一つ一つ枝豆を採りながら、子どもたちと何個付いているか確認した結果、4歳児が数えた枝豆は62個、5歳児の枝豆はなんと、ぴったり50個！「やったー！当たった！」と、大喜び。ズラッと並んだ枝豆に「うわー！いっぱい！」と歓声があがる。盛り上がってきた所で、「お料理して食べちゃおっか？」と、持ちかけると「うんうん！」とうなずく子どもたち。「早くやりたーい！」と、E児。「早く食べたーい！」とF児。

数あてをすることで、枝豆への興味・関心度が高まり、活動意欲が湧いてきている。

<茹でた枝豆をむいてみよう！>

茹でた枝豆を一粒一粒ボウルに取り入れ、「おもしろーい！」と言うG児。薄皮までむくように声をかけると、「最初に(さやから)出てくる時は、ジャンパーを脱いで、もう一回(薄皮から)出てくると、はだかんぼうになっちゃう！」「つるつとして、赤ちゃんみたい」と5歳児。指先に集中し、感触を楽しむ。

そんな時、「あれ？この枝豆、ちょっと黄色いよ」とF児。驚いた周囲の子たちも、どれどれと覗き込む。「先生、どうして枝豆なのに、黄色いの？」と質問された。「よく気が付いたね。枝豆が枯れてくると、何かに変わるんだよ」「黄色いお豆って知ってる？」と今度は、保育士が子どもたちに質問した。「知ってる、大豆！」とG児。「わかった、枝豆は、大豆の赤ちゃんなんだね」とH児。

枝豆が出てくる様子を、よく観察して、子どもらしい表現ができています。

子どもの気付き、疑問を大事にしたい。

子どもらしい理解の仕方でも、本質を理解できています。

<枝豆をすりつぶしてみよう！>

すり鉢と棒を、子どもたちに見せる。「なんだかわかる？」と保育士。「ばあちゃんの家にあったよ」「棒でつぶすんだよね」と答えが返ってくる。ほとんどが初めての体験のようだ。4・5人のグループごとにつぶし始めると、「上手くできない」とI児。「打つようにつぶすんだよ」と保育士がやってみた。

あるグループでは、一本の棒を順番で使い、一人ずつつぶす。あるグループでは、一本の棒をみんなで握り、みんなでつぶす。みんなでつぶしていたグループでは、「おいしくな～れ、おいしくな～れ」と掛け声をかけているうちに、やがてそれが楽しいリズムを含み、歌となって、子どもの口から流れ出す。

子どもは、嬉しいと歌い、歌が子どもを楽しくさせる。私たち保育士は、子どもたちの心の動きに寄り添い、子どもは心の動きを言葉やしぐさなどで表現し、その秘めた可能性を私たちに示してくれる。なんてやりがいのある、すばらしい仕事だと、子どもたちが感じさせてくれた。



せっかくの機会だから、日本の食の伝統にも触れさせたい。

一人ずつ順番で行うより、みんなで一緒に行うことで、楽しさが何倍にもなっている。

みどころ

枝豆をそのまま茹でて食べることももちろん楽しめますが、「何個枝豆が付いているか？」という興味をもって「豆」に注目して活動が展開します。「薄皮をむく」ことで、「はだかんぼう」「つるつるして赤ちゃんみたい」という今までにない発見や表現が引き出され、「すりつぶす」という調理の作業を楽しむことができました。

目的をもち、手間をかけて料理をすると違った味わいを楽しむことができるという、貴重な体験になっています。